



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	柿本人麻呂「羈旅歌八首」の位置：〈羈旅〉主題化の始発
Author(s)	関谷，由一
Citation	国語国文研究，144，14-31
Issue Date	2013-12-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93182
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_144_14-31.pdf



柿本人麻呂「羈旅歌八首」の位置

——「羈旅」主題化の始発——

関 谷 由 一

一 はじめに

——「旅の歌の傾向性」をどう見るか

『万葉集』中の旅の歌全体を見通した時に、そこに「家郷（故郷）」あるいは「家なる妹」へ向かうものと、「現地」へ向かうものとの二つの傾向性を認めることが、一般的である。大濱巖比古氏は、「斎はれてゐる家乃至は斎つてゐる妻への寿歌」と、「旅をしてゐる土地の精霊へのたむけの寿歌」の二つによつて旅の安全を祈つたことが旅の歌の原型であると説き、この二つの傾向を羈旅信仰と結びつける理解を示した⁽¹⁾。この視点は、神野志隆光氏の「旅人と家人との呪的共感関係の喚起⁽²⁾」および、「生命標⁽³⁾」としての重みを持つ地名をうたう「土地そのものへ向かう」歌の存在⁽³⁾、という論に継承されている。伊藤博氏もまた、「家」故郷」と「旅」異郷」とを対比してうたう点に古代行旅歌の一つの「鉄則的ともいふべき発想ないし型式⁽⁴⁾」を看

て取る立場から、氏の著名な「家」と「旅」論を構築している。⁽⁵⁾

万葉の旅の歌は文学的な意識で創作された「叙景歌」として、長く鑑賞されてきた歴史を持つ。そのような読みを転換し、古代和歌特有の論理を捉えようとした点でこれらの論は正當に評価されるべきであるが、今日では乗り越えられるべき点も多いのではないか。

これらの論者が、行路の安全を保障する呪的効果への信仰によつて『万葉集』の「羈旅歌」の様式性を説明しようとする点については、近年では否定的に評価されることも少なくない。⁽⁶⁾

また、これらの諸論が前提としている「旅」観は、例えば伊藤氏の、

地縁に生きる道しか与えられておらず、かりに逃亡に成功しても行く先は浮浪の民となることしかなかった古代日本人々にとつて、異郷の苦渋を解き放つ最良の方法は、本郷に向かつて歌う以外にすべはなかつたのである。⁽⁷⁾

といった発言に端的に表れているように、旅を苦痛と違和として捉

えることを基本とする。このような見方は古代民衆の「旅」を考へる場合には有効であろう。⁽⁸⁾だが、古代和歌の詠み手たる官人層の「旅」観は、民衆のそれとは異なる質の経験に根差したものと考へるべきではないだろうか。官人の場合には特に中世までを見通した時、駅制も機能していた八世紀は、後代に比して相対的に旅が「安全」であったという視点も必要であろう。

そもそも、旅の歌を論じる時、防人歌などを除く万葉和歌の作者たる官人層は、おおむね大和や都を「本郷」「故郷」とするものとの前提が共有されている。しかし、官人、特に下級官人たちの出身は、実態としては必ずしも大和や京師に限定されない。平城京跡出土「選叙」「考課」木簡によれば、官人の本貫地は多い順に、河内・左右京・大和・山城・摂津・近江・和泉・参河・遠江・播磨であり、他の史料によつて見ても「中央豪族の居住地と畿内とはおおむね一致するが、完全に一致するとは言いがたい」。⁽⁹⁾万葉の旅の歌の「都」「大和」が、実作者の生まれ育つた地であるとする前提に立つのではなく、これらの地が歌表現の上で思慕されるべきものとしてあつたと見るべきではないだろうか。

このように考えると、『万葉集』中の「旅の歌」の範囲は、従来考へられてきた程には自明のものではないことに気付く。「旅の歌」の範囲を定めようとするとき、各々の歌が「作者の故郷を離れた地」での作かどうかの検証は難しく、また、「大和以外の地」や「畿外の地」で作られたとされる歌は膨大にあり、その中の特定の歌を「旅の歌」とみなすためには、その歌の内容に「旅の歌」としての特徴を見出さなくてはならないからである。⁽¹⁰⁾

また、「羈旅歌」と「旅の歌」を同義に用いることもできない。例えば、『万葉集』巻七においては、「羈旅作」歌群（一一六一～一二五〇）が、直前の「芳野作」「山背作」「摂津作」に続くものとしてこれらとは区別された形で掲出されており、「畿外の地に在ること」が「羈旅」の要件であつたことが確認できる。一方、万葉歌中の「タビ（旅）」という語は、吉野（一七五、六九一三）・山背（四五四六、九一六八）・摂津（一六七、六九二八）での行幸従駕歌等でも用いられており、畿内の地に在る状況をも指し得るものであつた。集中には近隣の地で収穫のために仮小屋に泊まることを「タビ」と称した例（一〇二三五、二二四九）があり、阪下圭八氏が説くように古代語「タビ」の本義は「遠近にかかわらず他所へ寝泊りすること」であろう。⁽¹¹⁾

「タビ」という語が用いられる範囲は広く、そこから『万葉集』における「旅の歌」のありようを考へることは難しい。一方、「羈旅」と題される歌々——『万葉集』には勅撰集のような「羈旅」の部は存在せず、題詞・標目に「羈旅」の語を用いるものは限られる——には、ある傾向性を読み取ることができそうである。前稿でも述べたように、⁽¹²⁾「羈旅信仰」といった作品の外部で歌を規制するものによつて旅の歌の表現傾向を説明するより前に、「羈旅」という題の下でまとめられる歌々に共通する「羈旅」主題の傾向性を探るべきであろう。このような立場から、集中の「羈旅」歌、中でもその代表的な存在とも言える柿本人麻呂の「羈旅歌八首」について、その表現的位置を検討する必要がある。

二 「羈旅」をうたうということ

——移動表現と「大和島」の表象

『万葉集』巻三雑歌部には都・大和を離れた官人の作を多く載せる中で、「羈旅」と題した作品が三つある。「柿本朝臣人麻呂羈旅歌八首」(二四九)・二五六、「高市連黒人羈旅歌八首」(二七〇)・二七七、「羈旅歌一首并短歌」(三八八・三八九)がそれであるが、これらのうち前二者について、「羈旅歌」という題詞を持つ歌は、作歌事情が判明しなかったからこそ、そのような漠然とした題詞しかつけられなかった」のであり、作歌事情が不明で巻一・二に収められなかった歌から、タビの歌だけを集めて、「羈旅歌」という題詞をつけた人物がいたと考えるべきではないか」という見解がある。本稿は、「羈旅」の語を題詞に用いた人物が誰かといったことや、その編纂における「原資料」の実態を問題にするものではないが、それらがどのようなものであれ、「羈旅」の語には、何らかの主題を指し示す機能を認めてよいのではないだろうか。巻三の旅中詠には「柿本朝臣人麻呂歌一首」(二六六)、「高市連黒人歌二首」(二七九・二八〇)、「山部宿祢赤人歌六首」(三五七・三六三)といった作者名しか持たない題詞もあり、このように題することも可能だった中で、同一の作者(人麻呂・黒人)の作を、同一の巻の中で「羈旅」と題する点は無視できない。

巻三の黒人の旅の歌に関しては、「羈旅歌八首」は、「旅にして」(二七〇)、「うち越え見れば」(二七二)、「漕ぎ廻み行けば」(二七三)、「

「漕ぎ泊てむ」(二七四)、「我が宿りせむ」(二七五)、「別れかねつる」(二七六)、「早来ても」(二七七)といった詠歌主体自身が移動・旅行中であることを明示する歌が大半を占めるのに対し、それ以外の四首(二七九、二八〇、二八三、三〇五)中には出発をうたう「手折りて行かむ」(二八〇)を除けば、〈移動〉を強調する傾向はなく、黒人の「羈旅歌八首」の〈移動〉への傾きは明らかである。

このような〈移動〉に重きを置く傾向は、人麻呂の「羈旅歌八首」にも著しい。

柿本朝臣人麻呂羈旅歌八首

I 三津の崎 波を恐み 隠り江の 舟公宣奴嶋尔 (三二四九)
II 玉藻刈る 敏馬を過ぎて 夏草の 野島の崎に 船近付きぬ (二五〇)

一本に云はく、「処女を過ぎて 夏草の 野島が崎に 廬りす我は」

III 淡路の 野島の崎の 浜風に 妹が結びし(妹之結) 紐吹き返す(紐吹返)

IV 荒たへの 藤江の浦に すぎき釣る 海人とか見らむ 旅行く我を (二五二)

V 稲日野も 行き過ぎかてに 思へれば 心恋しき 加古の島見ゆへに云ふ「水門見ゆ」 (二五三)

VI 燈火の 明石大門に 入らむ日や 漕ぎ別れなむ 家のあたり見ず(家望見) (二五四)

VII 天離る 夷の長道（夷・長道） ゆ 恋ひ来れば 明石の門より 大

和島（倭嶋） 見ゆへ一本に云ふ、「家のあたり見ゆ」 (二五五)

VIII 飼飯の海の 庭良くあらし 刈薦の 乱れて出づ見ゆ 海人の
釣舟 (二五六)

一本に云はく、「武庫の海 船庭ならし（船・波有之） いざり
する 海人の釣船 波の上ゆ見ゆ」

右に人麻呂の「羈旅歌八首」(以下、「当該八首」とする)の本文を掲げた。なお、ここでは異伝(「一本」「一云」)は当該八首とは別の作品として扱う。II・IV・VII・VIIIの四首の「一本」歌については伝誦、推敲の両説があるが、前説に従う。また、「一本」歌と15三六〇六く〇九との間の差異については転写の誤りと見る説に従う。

右の八首のうち、出発と旅の終わりをうたうI・VIIIを除く六首のうち五首が、「舟近付きぬ」(II)、「旅行く我」(IV)、「行き過ぎ」(V)、「漕ぎ別れなむ」(VI)、「恋ひ来れ」(VII)と、旅行中の自らの姿を動的に描き出している。特にII歌は移動表現と地名のみで構成され、一首から「明るく踊る気分」(窪田空穂「評釈」)を読むことも、「荒涼」へ近づく「旅愁」¹⁶を読むことのどちらも許容するような、「結果的に『移動すること』『動きそのもの』に重点がおかれている」表現の質を持っている。同様のことはV歌にも言え、「十分に言語化されていない」¹⁷「読み手の様々な思いを許容する」と評され得る表現となっている。

このようなII歌は、一本歌とほぼ一致する巻十五「所に当たりて誦詠せる古歌」の、

玉藻刈る 処女を過ぎて 夏草の 野島が崎に 廬りす我は

(15三六〇六)

と比較すると、その志向の異なりが明確になる。右の歌と、「発ちに臨む時に作る歌」の、

大伴の 三津に船乗り 漕ぎ出ては いづれの島に 廬りせむ
我 (15三五九三)

とを並べた時、菊川恵三氏が指摘するように、「旅立ちに際する宿りの不安が、鄙の孤独として現実のものとなった」¹⁸ことをうたう両首は、語・発想のレベルでの対応が認められよう。遣新羅使人歌群は、「心情的には「妹」、時間的には「秋」を核」¹⁹とするものであり、その他の「家なる妹」への恋情を前面に出す旅の歌と比べても、当該八首は「移動」それ自体に光を当てる傾向を、顕著な個性として認めることができる。

このように見た時に、八首全体を「旅の歌における家・妹に向かう傾向」によって説明されることも多かった、従来の当該八首の理解に問題はなかっただろうか。また、その表現史的把握は適切だったであろうか。

稲岡耕二氏は、「万葉の羈旅係恋の歌は人麻呂の時代までくだったける可能性がある」として、

人麻呂の旅の歌では、神に対する祈りや旅の困難が歌われ、土地の位相に従って係恋の情が詠まれる。前者は前代から受け継がれた伝統を踏むが、後者は人麻呂の時代に新たに進められた抒情の領域のように見える。

と述べ、人麻呂の羈旅歌八首において「係恋」表現が新たに獲得さ

れたものとの見通しを示す⁽²⁰⁾。当該八首の表現性を「旅の歌」の一般的なあり方に解消しない点は、確かに重要な指摘であるといえる。

また、阿蘇瑞枝氏には、壬申の乱以前の万葉第一期の旅中詠において、作歌年代に疑問がある軍王の歌（一五、六）を除けば家郷を偲ぶ作はなく、「著名な土地・風物に対する憧憬・感動が羈旅歌のはじめから優位を占めている」との指摘⁽²¹⁾があり、これを承けて近年の三田誠司氏の論考でも、前掲の稲岡氏と同様に、「故郷や、家に残してきた妻への心情を吐露する作品の始発点」に、当該八首等の人麻呂作品を位置づけている。当該八首の一部、特にⅢ歌やⅥ歌の「家」に、「係恋」や「妻への心情」を読み取ることは当然認められるが、当該八首が〈移動〉それ自体に光を当てることの意味、またそのような歌が全体として「羈旅」と題されることの意義は、そこに留まらないと思われる。

当該八首が〈移動〉そのものをうたうのは、それが天皇を中心とした畿内（「大和島」）に象徴される王権からの離脱の意識化に他ならず、そのことが当該八首の題詞「羈旅」が担う主題と密接に関わるからではないだろうか。

平館英子氏が指摘するように、上代文学の形成と関わりの深い『文選』が収載する詩文中の「羈（羈）旅」について、李善注はそのほとんどに「左氏傳、陳敬仲曰、羈旅之臣」を引き、「他国から来て身を寄せている臣下」の意である「羈旅之臣」が、漢語「羈（羈）旅」の表現性の根本にあることを示している。その延長上に、詩文において「羈旅而無友生」⁽²²⁾（「楚辭」九辯・第一段）、「親懿莫從、羈孤遯進」（謝莊「月賦」）『文選』十三卷といった、「羈旅」の苦しみを

「親」「友」の不在（別離）と同列のものとして表現する傾向が存在する。一方で、梁の庾信が捕囚後に北朝に仕えた時に多く用いた「羈旅」という語は「旧国を滅ぼし旧主や縁者を殺した敵国に仕えて生きている」ことの屈辱を内包するものであったとされ、六朝詩においても、「羈旅」という語には「仕えるべき主君の元にいらない」という表現性がつきまとうものであったようである。このような「羈旅（之臣）」の意識を主題とすることで、主君のいる地から遠ざかってゆく〈移動〉の過程自体が歌の形を取ることが可能となり、また意味を持ったのではないか。

具体的に見てゆく。ⅥおよびⅦ歌で、畿内の境界としての明石海峡——大化二年の改新の詔で「西自三赤石櫛淵以来」と定められる——がうたわれることが、当該八首理解の上で決定的な重みを持つことについては、既に大浦誠士氏に指摘がある。大浦氏は、畿内の制度が明確化してくるのが天武・持統朝の段階であり、その時期に生まれた中央と地方の新しい理念的関係が万葉の行旅歌における地名意識に表れているとし、Ⅶ歌について、

特に⑥歌の「明石の門」から「大和島」を望む歌い方は、数ヶ国を隔てた二地点を歌う点で特筆すべきであろう。さらにその眺望が「天離る鄙の長道」を旅してきた末のものであるとする歌い方は、統一国家の版図としての地方の広がりを意識することとを抜きには不可能なものである。逆に言えば、そうした意識によつてこそ、「旅ゆくこと」が壮大なスケールで形を与えられているのである。

と、その意義を説く。氏はさらに、Ⅱ・Ⅴ・Ⅶ歌の「旅程上の二地

点を詠み込むことが、西下・東上の旅にある主体を動態的に捉える上で重要な働きを持つている」とし、Ⅳ歌における「旅行く我」の意識化にも説き及ぶ。²⁵⁾

ここで注意したいのはⅦ歌の「大和島」(原文「倭嶋」)の表現性である。「天離る夷の長道」から慕い来ったことと対照されるものであるが、この「大和島」は通説のように、「家郷の大和のある陸地」(西宮一民『全注』)、「故郷大和のある陸地」(『新編全集』)、「故郷大和の山々」(『和歌大系』)といった、「故郷」として解する傾向には、問題があると言わざるを得ない。

まず、「大和島」と対置される「夷(ヒナ)」について見る。その用例は畿外地域にのみ用いられ、後期万葉に多くの例を見る。人麻呂の使用二例(当該歌と、一二九の近江荒都歌)以前に例を見ず、人麻呂以降の例では「天離る夷治めにと」(9一七八五、笠金村)、「天離る夷治めにと」(13三二九一或本)、「天離る夷も治むる ますらををやかに物思ふ」(17三九七三、大伴池主)、「大君の遠の朝廷そ……天離る夷にしあれば」(17四〇一一、大伴家持)といった、「治め」の対象であることを強調する例が全二八例中九例(右の他に17三九五七、17三九七八、17四〇〇八、18四一一三、19四二一四)と、三分の一を占め、異郷としての畏怖よりも統治の対象としての面が強調される傾向にある。

中西進氏は、「ヒナ」が万葉の訓字表記例では田舎の意の「鄙」や「県」ではなく、全て「化外の外国」を意味する「夷」と表記されることに注意している。²⁶⁾言うまでもなく、人麻呂の時代の山陽道付近に王権に服さない蝦夷が居住していたのではない。それは「独善的

なエリート意識」(中西氏)というにとどまらず、対置される「大和島」を中心とした観念的な華夷秩序によるものということにならないだろうか。つまり、「大和島」には、「夷」に対置される擬似的・理念的な〈華〉としての性格が認められるのではないか。

「大和島」については、和田嘉寿男氏が「島」は「秋津島」といった場合の「島」と同じく国土それ自体を指す用語であるとして、Ⅶ歌について

少なくとも妻子や知己の待つ大和に帰って来たというような意識でなくて、大君のしろしめす大和に帰って来たという意識になる。²⁷⁾

と説くところや、菊川氏が、人麻呂の筑紫下向歌(3三〇三・三〇四)に「かつては見えていた神話を全体的に追憶の中に回復させるこの人麻呂の方法」²⁸⁾が見られるとし、その三〇三で「大和島根」とあることを重視して、

それは大宰府を「遠の朝廷」——ここが初出——ととらえる人麻呂の意識と無関係ではないだろう。また吉野讃歌において、今を「神の御代かも」とうたう意識に通じる。天皇と結びついた神話への信頼、「大和島」は家郷の妹を越えてあつたのではないか。²⁹⁾

と説くところが示唆に富む。菊地義裕氏が、Ⅶ歌の「大和島」が「家」とはうたわれないことを重視して「望郷の思いとはいっても、宮廷の集団を背景にしているの畿内に対する思い」³⁰⁾と解しているように、Ⅶ歌の「大和島」は、家郷を意味するⅥ歌の「家のあたり」と等価ではあり得ない。Ⅶ歌は、「夷」と対比される、天皇を中心とした宮廷

の象徴としての「大和島」への帰還を描き出しているのである。

この「夷—大和島」が、「明石海峡」を挟んでうたわれることで、「畿外—畿内」の対置構造と対応する点が重要である。擬似的・理念的な〈夷〉が、現実には王権の支配する領域内の畿外諸国と対応する構造は、古代日本における一つの思考様式と対応関係を持つようである。石上英一氏が、本来特定領域を唯一の権力として代表する主権国家である「国」が、日本列島では倭国の支配する領域内の地方行政上の単位「国」²として擬制的に制度化されるところに日本の中華思想の特徴たる「帝国の矮小な構造」を認め、

畿内は、実態的には、国家権力の中央政府機構を構成する大王
天皇および中央豪族層・貴族層の集住地域、中央政府機構の
造営、運営のための労働力供給と物流確保のための人為的に設
定された地域であった。ウチツクニとヨモノクニ・トツクニ・
ヒナとを対照させる帝國的観念は、天皇・貴族層により意図的
に構想された世界観、非帝國的実態を帝国に近づけようとする
主観のなかのものでしかなかった。³¹

と説くところである。

当該八首における畿外地域との往還は、単に「家の妻」のいる故郷を離れ見知らぬ土地にあることを意味するのではなく、石上氏のいう律令国家による「世界観」「主観」と同質の、〈華〉たる「大和島」と観念的〈夷〉との往還として構造化されているのではないか。そのような構造が、そこからの〈離脱〉や〈移動〉に特別な意味を与え、II歌のような〈移動〉表現と地名のみで構成される歌にも存在意義を与えているのであろう。当該八首に現われる「家なる妹」

(およびそれが表象する家郷・故郷)への思いを否定することは出来ないが、八首を貫く〈羈旅〉主題とは、仕えるべき王権(大和島)を離れ、「夷」たる畿外諸国を移動することそのものの感慨——それ自体は不本意なものであると同時に、そこに王命を帯びた官人としてのある諦念を認めるべきであらう——であるのではないか。以下、各歌の表現に即してその点を確認していきたい。

三 〈羈旅〉の多様な局面をうたう

——I、VI、VIII歌の解釈

I歌は、〈羈旅〉の始まりを告げる歌と言える。下二句が難訓として知られ未だ定訓を得ない(伊丹末雄『万葉集難訓考』、西宮一民『全注』巻三に諸訓が整理されている)が、初句で難波津の埼をよむことからおおむね「船出せし日の哥」(『万葉考』)と解されている。それに対し稲岡耕二氏が「舟公宿美奴馬尔(舟なる公は宿る美奴馬に)」と字を改めた上で、

三津の埼が同伴の三津と呼ばれた難波の港の近くに突出した岬であるなら、「三津の埼浪を恐み」という程の波浪に際して一度進発した舟人が、うろろうと他の島に上陸するようなことを想定するよりも、もとの港に引き返すか、さらに慎重な場合には舟出を延期するようなことを考える方が穏やかであらう。

という理由から東上時の作とする解を示している。稲岡説は誤字・脱字説に拠らざるを得ない点に難があるが、一度出発した一行が近隣の地に再上陸することも不審とするにあたらないのではないか。

難波津での潮待ちは一般的なことであり（15三五九四、三六二七）、
「浪速国」の地名起源譚（神武紀）のように、難波津周辺の激しい潮流を「浪」とも称したと思われ、「潮流（なみ）が恐ろしいので、隠（かく）して（潮待ちして）おられた」と解し、一首を西下時の出発を背景として読むことができるからである。

ところで、I歌の下句の訓みは不確定でありつつも、通説は「舟公」を「舟おき」（契沖『代匠記（初）』）、^{（1）}「船公（長田王）」（『全注』）等と解する傾向にあるが、「舟なる公」は旅人自身を指すと考えることもできる。集中の「Aなる（にある）B」という例では、作中の人物であるBの置かれているA（場・状況）は詠歌主体のそれとは異なる傾向にあり、I歌の詠歌主体は見送る者に設定されていると見る説に従いたい。これにより、当該八首は、単に柿本人麻呂自身の旅中詠を類聚したものではなく、複数の視点から一人の官人の〈旅〉を描き出したものとして読むべきことが確認される。

II歌については、通説では「玉藻刈る」「夏草の」が枕詞として用いられるとともに実景に基づく表現であるとされる。中西進氏がここに「やさしい少女の玉藻刈る風景」と「人影もない岩石の自然」との対照を見、「このやさしさを『過ぎ』、荒涼に『近づき』」といったところに、人麻呂の旅愁があつたと説くところである。確かに、^{（2）}まそ鏡 敏馬の浦は 百船の 過ぎて行くべき 浜ならなくに

（6一〇六六）

とうたわれるように、敏馬は「強く愛着を感じる懐かしい所」であり、全体は「敏馬を素通りしたことへの人々の深い嘆きの気持を代表した、人麻呂の感慨がこめられていた」と読むべきであろう。^{（3）}「三

大女」（6九四六）、「見宿女」（6一〇六六）といった表記からは、「敏馬」の「め」に「女」の意を感じていた^{（4）}可能性も否定はできない。

しかし、「敏馬」という地名にも『未だ見ぬ女』の音の上での連想がある（『全注』）、「故郷の妻が見えないという名の敏馬」（『釈注』）というように、自らの妻が見えないことへの連想までは読み取ることは無理があるろう。訓字表記からは、「ヌ」は「イヌ」と受け取られたことは確認できても、打消として取られた形跡がなく、地名「敏馬」に妻に逢えないことを想起させる機能は見出しにくい。一首が旅の歌であることから、「家なる妻」を思慕するものとして読もうとすることによる、行き過ぎた解釈というべきである。

むしろ、「敏馬」を過ぎ「野島」へ向かうことが旅愁として持つ質とは、前者が摂津国にあつて畿内の最西端に属するのに対し、後者が淡路国にあつて畿外（夷）に属することによるのではないだろうか。後代の史料であるが、『延喜式』玄蕃寮（巻二十一）に、入京する新羅使に対し最初に神酒が給される場所が「敏売崎」であることが記されるのも、敏馬の地が「大王権力の中枢域に入る時、その最初の玄関口が当地だった」とこと関わるはずである。「百船の泊つる泊まり」（6一〇六五）である「敏馬（の浦）」が王畿の内であるのに対し、「野島」は、山部赤人の難波宮行幸歌に「御食つ国野島の海人」（6九三四）とうたわれ、そこは天皇の支配が及ぶことで天皇の世界を全円たらしめる「非農耕の世界」の象徴であり、農耕世界たる「食す国」と対置されていたことが想起される。^{（5）}

なお、「敏馬」にかかる「玉藻刈る」を「海人たちが玉藻を刈る」

〔古典集成〕と解する注釈書が多いが、「敏馬（の浦）」と「海人」「海人少女」を共に歌い込む例はなく、また「玉藻刈る」は海人の行為に限らず、旅先の海辺の景を讀める文脈で官人による「玉藻刈る行為」が詠まれる例がある（一四一、六九五八）。「敏馬」に夷の象徴たる「海人」の姿を読み込む必要は無いだろう。

Ⅲ歌は、淡路の野島に在って都の「妹」への思いをうたうものである。「妹が結びし紐吹き返す」について、『注釈』は、「結べる」は今現に結ばれてゐる紐について云ひ、『結びし』は結んだ折の妹を偲んでの言葉といふべきであるとし、「妹」が結んでくれた紐を吹き返すままにしている「放任的使役」であると説く。それによって表現される「現在」によって「過去」の「妹」の姿を想起するのである。

このⅢ歌に関しては、行旅歌において「紐を解く／解かない／解ける」ことをうたうものは多いのに対し、紐が風にはためく様を描写的にうたう例を他に見ないことに注意する必要がある。折口信夫が説くように、男の衣装の中に女の魂が結びこめられその紐の結が解けると「相手の身に変事が起る⁽⁴⁾」のである。実際はそうした呪的効果への期待よりも「情愛を込めて結ばれるが故に、相手は、結ばれた紐をその情愛の徴と見、離れていても結んだ者に守られていると感ずる⁽⁵⁾」という機制が重要なのであろうが、Ⅲ歌にあつては、「解かない」ことによる「情愛の確認」とも、逆に「解ける・絶える」ことによる「情愛の揺らぎ」ともとることができない特異な表現となっている。金子元臣『評釈』が「外面的矜持と内面的哀愁とが綯ひ交ぜに絡み合つて、幾多の葛藤を野島の岬頭で演出してゐる」と

評するように、この歌からは直接的な恋情表出を阻むような状況——王命を受けて「夷」に向かう——下での「矜持」、ある種の葛藤を読み取るべきなのではないか。

加えて、稲岡耕二氏に、

a 登城脊南顧 凱風揚微綯

b 涼颺自遠集 輕襟隨風吹（右同、潘岳「河陽縣作二首」）

c 哀風中夜流 孤獸更我前（右同、陸機「赴洛道中作二首」）

といった例を挙げて、「妹が結びし紐」には古代の呪的習俗がよみこまれているのだが、この歌がそうした風俗をのみ歌ったと受けとるのは正しくないだろう⁽⁴³⁾という指摘がある。ここは旅の紐結びの習俗を踏まえつつ、中国詩における旅愁表現に学んで「羈旅」の世界を表現する試みだったとも言い得よう。

Ⅳ歌は、「旅行く」自らが、夷を代表する景物である「海人」と見紛われることをうたうもので、「公人としての自負があり、しかも他人がそれを知らないで漁夫と見ているであろうという所には、寂寥感が潜んでいる」（『全註釈』増訂版）ものといえる。播磨の「藤江」に冠せられた「荒栲」に、藤を原料として目の粗い布を織る所から、「暗く荒涼とした風景を写象として伴う」喚情的機能を看取るべきだろう。あるいは麻績王の流謫歌（一二三、二四）における「海人」の表象と共通する「政治的失脚、暗の世界から追放といったが如き物語を仮想⁽⁴⁵⁾」しているといった見方も可能である。ただし、麻績王にしても当該Ⅳ歌にしても、高木市之助氏が説くような「海人」が

「不幸」で「卑しい」ものであるといった身分差の意識⁽⁴⁶⁾よりは、むしろ「夷」を象徴する景物たる「海人」に自らが紛れてしまう点に「寂寥」の中心があるのだと考えたい。

付け加えて言えば、「海人とか見らむ」という疑問表現の存在は、夷の景である「海人」と同化し得ない境涯を強調することで「故郷の官人としての生活と切り離されてあることと今在る土地の生活と切り離されてあることという日常性からの二重の疎外⁽⁴⁸⁾」という「羈旅」主題を浮き上がらせている。そこには、「羈旅」に伴う「出発地と到着先のどちらにも属さない」境遇が現出しているともいえる。

V 歌については、「稲日野」と「加古の島」の位置関係について諸説があるが、ここでは、播磨国明石郡から加古郡の「稲日野」、加古郡・印南郡の郡境界を流れる加古川の河口付近の島を「加古の島」といったとする説に従う。そうするとV 歌を西下の船行上の作とみなすことに問題はないこととなる。

「行き過ぎかてに」の理由については、井手至氏が説くように、用例から心理的理由と考えるべきであろう。その理由の内実について、近年の諸注・諸論考の多くは稲日野が風光明媚な点のみに求めない傾向がある。例えば、『播磨国風土記』賀古郡において印南別嬢が景行天皇の求婚を逃れて「南毗都麻」に逃れる「隠妻（なびつま）」伝説を踏まえたものとする都倉義孝氏は「加古の島」を「南毗都麻」とし、「稲日野も」とともに人麻呂にとって心恋しいナビツマ説話の縁の地であり、同時に、氏はこの歌は伝説（イナビツマ）への追憶一色ではなく現実の妻（ツマ）への思慕も重ね合わせられているとする⁽⁵²⁾。また吉永登氏は「加古」に「か子」すなわち家妻を連想して

いると解し⁽⁵³⁾、都倉・吉永両氏の説は『集成』『全注』『釈注』『和歌大系』など近年の多くの注釈書に採用され現在に至っている。これらに対し秦野武国氏は、「稲日野」が行過ぎがたいのは、佳景によるのでも伝説によるのでもなく、明石海峡に隣接する「畿内国・畿外国の境に連なる境外の平野」という性格である⁽⁵⁴⁾とし、神野志隆光氏がこれを支持する。

しかし、都倉氏の説に対しては『風土記』の説話と故郷に残してきた「妻」とでは「ツマ」という語以外に共通項がなく、当該歌で詠まれる地名「イナビノ」の音から連想されたとも考えにくい。吉永氏の説くように、「加古」に「か子」を連想したとしても、それを家妻思慕表現とみるのも強引ではないだろうか（これも、「家の妻を思う」とされる、旅の歌の「一般的傾向」によって解した結果といえる）。また、秦野論の「境に連なる境外の平野」という把握についても、明確に畿外（夷）である播磨国に属す「稲日野」を、改新詔以来の境界の地としての「明石（海峡）」と同列に論じる点に無理があるように思う。

「行き過ぎかて」および「加古の島」が「心恋しき」理由について、隠妻伝説を想定することは間違っていないが、その契機が問題となると思われる。〈景物に恋ふる〉例として、

- a これやこの 大和にしては 我が恋ふる 紀路にありといふ 名に負ふ背の山 (1三五)
- b ……並み立ちの 見が欲し山と 神代より 人の言ひ継ぎ国見する 筑波の山を 冬ごもり 時じき時と 見ずて行かば まして恋しみ…… (3三八二)

c 皆人の 恋ふるみ吉野 今日見れば うべも恋ひけり 山

川清み (711-1121)

d 吉野川 川波高み 滝の浦を 見ずかなりなむ 恋しけま

くに (917-1121)

e いづしかも 見むと思ひし 粟島を 外にや恋ひむ 行く

よしをなみ (1536-1121)

などが挙げられる。これらの場合、破線部のように都にいた時から見たいというものであったり(a d e)、都の官人社会で皆が「恋ふる」ことが自らの憧れの理由となっていたり(c)、あるいは「神代から人の言ひ継ぎ」(b)することが「恋」の理由であったりする。当該V歌においても、その地に関わる都の官人層に共有された何らかの伝説を以って「心恋し」い思いを事前に抱くことは、右の諸例からも十分考えられるのではないか。中西氏の「このような太古の神話を背負った土地は、なつかしく『心恋しき』土地だったであろう」(「恋していたものは、実は所与の精神構造に投影する神話に他ならなかった」という、古代官人層の共有していた景物観についての指摘は肯われるものである。当該V歌が『風土記』の説話内容を厳密に踏まえていたかどうかは問題ではなく、その地に、都人が共有する伝承、特に天皇と結びついた伝承が存在すれば——3245・四六の「水島」と景行天皇征西時の地名起源譚のように——、「心恋しき」に値したのであろう。V歌は、「行き過ぎ」難いにも関わらず先を急がねばならない辛さの中に、「心恋しき加古の島」を前方に望む「喜び」をうたうものと解したい。そこには、間接的ながら天皇と結びついた神話への志向が窺える点で、当該八首の「羈旅」が王

権からの別離を主題とすることも相適う。

VI歌は、古来名歌とされているもので解釈の揺れもほとんどない。『玉の小琴』以来、「家のあたり見ず」を「漕ぎ別れなむ」に倒置して解し、かつ「大和は山の彼方で、故郷の家が見えるわけではないが、大和境の山々を眺めて『家のあたり』と云つた」(「注釈」とみなして難波津出航後、明石海峡に至らぬ西下時の作とみなすのが、通説である。

VI歌を解釈するうえで重要なのは、「入らむ日や」という句の作り出す時間構造であろう。〈過去〉を象徴する「家のあたり」は、「む」によって〈未来〉を担う「明石大門に入らむ日」に「漕ぎ別れてしまふ」とされる。したがって、「現在の事実として家のあたりを遠望しつつ来て、その望めなくなることを思ふと思ふさへも悲しくなつて来て、その悲しみを云ふことを作意とした」(窪田空穂『評釈』^{傍点}と解するのが自然のようであるが、ここで問題が生じる。「家のあたり見ず」のまま「漕ぎ別れなむ」と解する以上、「家のあたりを見ない」状態は、現在も続いていなければならないことになるからである。

a 国遠き 道の長手を おほほしく 今日や過ぎなむ 言問

びもなく (5884、麻田陽春「大伴君熊凝歌二首」)

b 荒磯越す 波を恐み 淡路島 見ずや過ぎなむ ここだ近

きに (711-180)

c 近江の海 波恐みと 風守り 年はや経なむ 漕ぐとはな

しに (7139-180)

d 吉野川 川波高み 滝の浦を 見ずかなりなむ 恋しけま

「な(完了)・む(推量)」+倒置の例を右に示した。aでは、行路で死につつある熊凝が故郷に残してきた父母に「言問いしないま」この世に別れを告げてしまうのだからかと嘆く歌であるように、これらはいずれも傍線部分の事態が未来において完了することが推量され、事態は倒置によつて強調される破線部分を伴つて現在においては進行または継続している。熊凝は「身罷る」ことによつて父母への「言問い」が決定的に不可能になるのであり、「言問ひ」それ自体は「身罷る」以前から不可能な状態が継続している。b・dも同様である。木下正俊氏は、当該VI歌やa・cの本来の形であるへ一人称を主格とし、文中に疑問の係助詞ヤがあり、かつ文末を推量の助動詞ムで結ぶ文型を「斯くや嘆かむ」の語法とし、その内容は「『現在』から『未来』にかけて連続している状態についての自問」とする。この語法は、「このヤムを含む一人称主格の疑問文の述部には例外なく話し手の『現在』の腑甲斐ない状態を表わす語句が来、しかもその状態をじれつたく思いながらさりとてどうすることもできないでいる」表現であり、基本的に例外はないと説く⁽⁵⁷⁾。

これらの例から考えると、当該VI歌の詠歌主体は、今も見えない状態にある「家のあたり」が、「明石大門に入らむ日」に決定的に見えなくなることを行っているのであろう。そうだとすると、通説のように「大和境の山」を「家のあたり」とするならば、それらを詠歌主体が遠望可能とされる大阪湾上またはその周辺にいる状況というのは考えにくいことになる。「家のあたり」が大和の葛城山方面を指す例は丹比笠麻呂の作(45〇九、後掲)があるとはいえ、当該

VI歌では人麻呂にとつての「家のあたり」は、湾上や湾岸では見ることのできない都・大和の自宅周辺であり、次歌VIIの「大和島」とは異なる対象を指すと考えたい。

「家のあたり」が詠まれる集中の八例は、いずれも「家のあたり」を見る(45〇九、12三〇五七、15三六〇八、もしくは見よう(見られよう)と試みる(7一二四四、11二六〇九、12二九四七或本)対象とし、あるいは通過しかねるものとうたう(14三四二三、14三五四二)。葛城山塊を「家のあたり」と見立てて「見ゆ」「見む」などと表現し、雲などが障害となつて見えないのであればそのことを嘆くのが、「見る」ことによつて、そこに繋がろうとする⁽⁵⁸⁾。通常の出立や別離の歌であろう。同じ作者の「妹があたり見む」(2一三七)といった恋慕表現がその典型例であるのに対し、VI歌において示されているものはこれらとは異なり、III歌で既に見たような「羈旅」状況下での、葛藤を伴う抑制された——後ろ髪を引かれる思いを抱きながら、決して振り返らない——思慕表現なのではないだろうか。

VIII歌は旅先の二ハ(海面)の穏やかさを讃えることで〈安堵〉の思いをうたうもので、冒頭I歌のうたう〈出発〉と対応する。なお、前掲の高木市之助氏が、当該VIII歌の「海人」を、IV歌の「海人」と対蹠的な「自然の一角としてあまを見る見方」(一二五頁)の代表とするのに対し、和田明美氏は「そのように相反する対象把握に基づく作品が、同一の連作に混在しうるのであるか」と批判するが⁽⁵⁹⁾、先に見たように「海人」が「夷」の景物としてうたわれることを押さえれば、IV歌の「海人」と相反するものと捉える必要はないであ

ろう。

四 おわりに

——人麻呂「羈旅歌八首」の表現史的位置

以上、本稿では当該八首を貫く〈羈旅〉主題が、仕えるべき王権から離れ、「夷」たる畿外諸国を移動することそのものの感慨——不本意なものであると同時に、そこに王命を帯びた官人としての諦念を含むものとしてある——として作品内に形象化されていることを確認した。それは、具体的には次の三点にまとめられる。

- (1) II 歌の「敏馬」と「野島」、VII 歌での「大和島」と「夷（の長道）」とは、それぞれ、明石海峡を境に区切られた王権の中心たる畿内と、当地の対象である畿外の表象であり、それは天皇・貴族層により意図的に構想された世界観に基づく、理念的な対立軸であって、当該八首における〈羈旅〉主題の基底をなすものであった。

- (2) II 歌および V 歌の「……を過ぎ……」という構造は、指摘されてきたとおり〈移動〉そのものに重きを置いたものであり、特に V 歌の「稲日野」を行き過ぎ難いとし「加古の島」を恋の対象とするところには、古代官人的な景物意識を認めることができた。

- (3) 指摘されてきた「家なる妹」への思慕は、III 歌における「妹が結びし紐吹き返す」という放任的使役による回想、および VI 歌における「漕ぎ別れなむ家のあたり見ず」（「家のあたりを見る

ことなしに、このまま（決定的に）漕ぎ別れてしまうのだろうか」という、諦念に似た表現において独特の抑制を受けた表現であり、(2)と共に〈羈旅〉という状況下の旅愁を十全に描くために不可欠のものであった。

集中の「羈旅」歌の代表的な存在とも言える柿本人麻呂の「羈旅歌八首」の表現史的位置については、当該八首それ自体は「羈旅（之臣）」の意識を根底に置き、「大和島」の王権・宮廷から遠ざかってゆく〈移動〉の過程自体をうたうことによつて、「家なる妻」への意識をも包摂した〈羈旅〉の全体を歌の形に描き出す試みであり、その結果として、先行研究が説くような、「羈旅係恋」の始発としての位置を獲得することにもなったと考えたい。

ところで、集中には「羈旅」という題を持たない多くの旅の歌が収載される。本稿ではこれらの作と「羈旅」歌とを区別してきたが、あくまで『万葉集』に収められた歌の中から和歌史を考えれば、両者の交流の中でこれらの表現傾向が形作られてきたということになるろう。

一つの推測であるが、旅の歌における「家なる妹」をうたう傾向性は、人麻呂より後の時代に、人麻呂の相聞作品の影響によって顕在化したということになるのではないだろうか。人麻呂作品には、旅先の女性との恋をうたう作品は「石見相聞歌」（2131—2139）、紀伊国での作歌（4496—4499、9179—9181）⁶⁰等の作があるのに対し、旅先で「家の妹」を恋う歌はそれほど目立つものではない（9168—9170、9196—9198、1231—1238）。それに対し、第三期の宮廷歌人の作や「遣新羅使人歌」にあつ

ては、思慕の対象が「家の妹」である作が、現地の女性である作よりも目につく。

その様な過程を窺わせるものとして、歌集の配列により第二期後半の文武朝に位置づけられる丹比筈麻呂の「下筑紫國時作歌」という作がある。

臣の女の 櫛笥に乗れる 鏡なす 三津の浜辺に さにつら
ふ 紐解き放けず 我妹子に 恋つつ居れば 明け闇の 朝霧
ごもり 鳴く鶴の 音のみし泣かゆ 我が恋ふる 千重の一重
も 慰もる 心もありやと 家のあたり 我が立ち見れば 青
旗の 葛城山に たなびける 白雲隠る 天さがる 夷の国辺
に 直向かふ 淡路を過ぎ 粟島を そがひに見つつ 朝な
ぎに 水手の声呼び 夕なぎに 梶の音しつ 波の上を い
行きさぐくみ 岩の間を い行きもとほり 稲日つま 浦廻
を過ぎて 鳥じもの なづさひ行けば 家の島 荒磯の上に
うちなびき しじに生ひたる なのりそが なども妹に 告
らず来にけむ (四五〇九、反歌略)

この歌は二重傍線部が、人麻呂「泣血哀慟歌」(二二〇七)に全く同一の歌句を持ち、かつ「三津」「淡路」「稲日(つま)」という地名(網掛部分)の列挙によって航程を描き出す手法は当該「羈旅歌八首」を引き継ぐものとなっており、人麻呂の歌風の影響下にあることがうかがわれる作である。同時に、清水克彦氏が指摘するように、傍線部が山部赤人の辛荷島を過る時の歌(六九四二)や神岳に登る歌(三三二四)に、それぞれ類似または共通し、さらに、遣新羅使人歌群にはよく似た長歌(一五三六二七)を載せることから、赤人等の後

期万葉の歌人たちに影響を与えたことも明らかである。⁽⁶⁾ここに、人麻呂作品に濃厚な「王権」への志向が、後期万葉的な「私情」表出に取って代わられる、過渡的な姿を見ることができないだろうか。旅の歌における相関性の展開把握を、今後の課題としたい。

*『万葉集』の引用は、『新編日本古典文学全集』によったが、私に改めたところがある。また、必要に応じて原文を小字で()内に示した。注釈書の略称は通行のものに従った。

*『楚辞』の引用は『新釈漢文大系』によった。『文選』の引用は本文を『全釈漢文大系』に、李善注を芸文印書館本によった。返り点が無いものも私に付した。

注

- (1) 大濱巖比古「叙景歌と人麻呂——その成立の契機としての「靡けこの山」——」、『新萬葉考』書肆大地、一九七九年。初出一九五七年一〇月二〇四〜二〇七頁
- (2) 神野志隆光「行路死人歌の周辺」、『柿本人麻呂研究』塙書房、一九九二年。初出一九七三年一二月三七七〜三八一頁
- (3) 神野志隆光「羈旅歌八首をめぐる」(注(2)前掲書、初出一九七八年三月二七六〜二七八頁
- (4) 伊藤博「家と旅」(『萬葉集の表現と方法』下)塙書房、一九七六年。初出一九七三年九月一二七頁

- (5) 伊藤論の「家」と「旅」概念は、そこに地理的限定を与えるべきではない場合があるという点で、修正を要すると考える(参照、拙稿「家」と「旅」再考——山上憶良「日本挽歌」の「家」をめぐる——『国語国文研究』一四〇、二〇一一年九月)。
- (6) 土佐秀里「石中死人歌の構成——〈神話〉の解体——」(『古代研究』三一、一九九八年一月・四八〜五一頁)、飯田勇『万葉集』の羈旅歌——防人歌を論じるために——(『首都大学東京都市教養学部人文・社会系 人文学報』四三二、二〇一〇年三月・五頁以下)、三田誠司「萬葉集における旅」(『萬葉集の羈旅と文芸』塙書房、二〇一二年・二一〜二二頁)等。
- (7) 伊藤博「萬葉のいのち」第三章「家」と「旅」(塙新書、一九八三年。初出一九七九年二月)一六三頁
- (8) 弥生時代以来、日本列島の民衆交通は拠点集落と周辺集落との間に限定されていた。それが、律令国家の個別人身支配を貫徹させる企図により庸調物の陸路人担が強制されることによって、新たな都鄙間交通が生まれたとされる(松原弘宣「古代の民衆交通」『日本古代の交通と情報伝達』及古書院、二〇〇九年。初出二〇〇五年)。
- (9) 鬼頭清明「〈補論〉平城宮出土木簡と下級官人」(『日本古代都市論序説』法政大学出版局、一九七七年。初出一九六八年)
- (10) 吉川聡「畿内と古代国家」(『史林』七九一五、一九九六年九月)七一九頁
- (11) 三田氏注(6)前掲論文は『万葉集』中の旅を整理・分類する中で、「国司として任地に赴く旅」として、大宰帥大伴旅人等の筑紫における諸作(巻三三、巻五)や、越中国守大伴家持の赴任先での諸作(巻十七〜十九)を挙げ、それらの中で平城京への憧憬・望郷の念を詠うものも認めつつも、全体としては「基本的には、旅の歌として捉えるべきものは少ないようである」とし、その理由を「任期中は当地において日常生活を営むわけであるから、常に「旅」を意識した歌作りがなされたと決まったわけでもない」(二〇頁)と推測している。
- (12) 阪下圭八「旅」という言葉(『古事記の語り口』笠間書院、二〇〇二年。初出一九八二年一月)二五二頁
- (13) 拙稿「羈旅」歌考——大伴卿卿従等の「悲傷羈旅」歌の場合一——(『美夫君志』八六、二〇一三年三月)三八〜四〇頁
- (14) 関隆司「天平二年の「羈旅」」(『高岡市万葉歴史館紀要』一五、二〇〇五年三月)八一頁
- (15) 稲岡耕二「人麻呂作歌異伝攷(一)——巻三羈旅歌について——」(『萬葉集研究』一一、一九八三年一月)
- (16) 中西進「旅愁」(『柿本人麻呂』筑摩書房、一九七〇年)一八七頁
- (17) 以上、菊川恵三「人麻呂羈旅歌八首と遣新羅使人歌誦詠古歌」(『国語と国文学』七八一三、二〇〇一年三月・二〇〜二二頁)より。
- (18) 菊川氏注(17)前掲論文・二〇頁
- (19) 伊藤博「万葉の歌物語」(『萬葉集の構造と成立』下、塙書房、一九七四年。初出一九六八年九月)一八頁

- (20) 稲岡耕二「万葉びとにおける旅」(『国文学』一八一九、一九七三年七月) 九六頁
- (21) 阿蘇瑞枝「万葉集羈旅歌の世界(二)」——初期万葉から奈良遷都まで——(『万葉和歌史論考』笠間書院、一九九二年。初出一九八〇年四月) 一六八頁
- (22) 三田誠司「柿本人麻呂と羈旅——羈旅歌八首の達成——」(注(6)前掲書、初出二〇〇九年二月) 五九頁
- (23) 平館英子「萬葉歌の意匠」(『萬葉歌の主題と意匠』塙書房、一九九八年。初出一九九七年一月) 四七頁
- (24) 安藤信広「羈旅する詩人たち——『万葉集』と六朝文学と——」(『日本文学誌要』二四、一九八一年二月) 五〇九頁
- (25) 大浦誠士「人麻呂羈旅歌八首の周辺——羈旅表現の成立——」(『万葉集の様式と表現 伝達可能な造形としての心』笠間書院、二〇〇八年。初出一九九七年四月) 一九〇〜一九一頁
- (26) 中西進「夷」(『万葉史の研究』桜楓社、一九六八年) 七七二〜七七九頁
- (27) 和田嘉寿男「大和島と大和島根——人麻呂の羈旅歌から——」(『武庫川国文』三七、一九九一年三月) 三頁
- (28) 内田賢徳「見る・見ゆ」と「思ふ・思ほゆ」——『万葉集』におけるその相関——(『萬葉』一一五、一九八三年一〇月) 二三頁
- (29) 菊川氏注(17)前掲論文・二四頁
- (30) 菊地義裕「人麻呂作歌の「夷」」(『柿本人麻呂の時代と表現』
- (31) おうふう、二〇〇六年。初出二〇〇一年三月・二二〇頁
- (32) 石上英一「律令国家と天皇」(『律令国家と社会構造』名著刊行会、一九九六年) 二三五〜二三六頁
- (33) 稲岡氏注(20)前掲論文・九二頁
- (34) 身崎壽「『羈旅歌八首』おぼえがき——冒頭歌と群末歌と——」(『声と文字 上代文学へのアプローチ』塙書房、一九九九年) が、稲岡説の推論の危うさを指摘する(二九〇〜二九一頁)。
- (35) 寺川真知夫「三津埼の恐き浪——二四九番歌小考——」(『花園大学 国文学論究』一五、一九八七年一〇月) 一七頁。なお、当時の難波津周辺には分岐した砂洲の間にラグーンが存在していたことが明らかにされており(目下雅義『古代景観の復原』中央公論社、一九九一年)、「隠り江」を難波津周辺の入り江と解することに支障はない。
- (36) 身崎氏注(33)前掲論文・二九二〜二九七頁
- (37) 中西氏注(16)前掲論文・一八七頁
- (38) 井手至「柿本人麻呂の羈旅歌八首」(『遊文録 萬葉篇1』和泉書院、初出一九七二年四月) 五二〜五五頁
- (39) 井手氏注(37)前掲論文・五五頁
- (40) 坂江涉「敏売浦と古代の神戸——地域史研究の一視角——」(『文化学年報』一七、一九九八年三月) 一〇六頁
- (41) 神野志隆光「赤人の難波行幸歌——天皇の世界と海人——」(『万葉の風土・文学 犬養孝博士米寿記念論集』塙書房、一九九五年) 一八六〜一八七頁

- (41) 折口信夫「万葉集研究」(中公文庫版『折口信夫全集』一、一九七五年。初出一九二八年九月) 四〇三頁
- (42) 鉄野昌弘「著けし紐解く」考——万葉集・二六二七歌をめぐって——(『東京女子大学日本文学』九五、二〇〇一年三月) 二二頁
- (43) 稲岡氏注(20)前掲論文・九五頁
- (44) 稲岡氏注(15)前掲論文・一七三頁
- (45) 都倉義孝「羈旅歌八首」『古代の文学』2 柿本人麻呂(早稲田大学出版部、一九七六年) 一七二頁
- (46) 高木市之助「あま」(『高木市之助全集 第四巻』、講談社、一九七六年。初出一九五七年四月) 一二三〜一二四頁
- (47) なお、三田氏注(22)前掲論文は、海人、特に海人の女性は魅力的なものとして描かれていること、また「海人」はにぎやかなに労働にいそしんでいて恋の苦しみとは無縁な存在としてうたわれること等から、当該Ⅳ歌を「家で待つ妻への恋情に苦しみつつ孤独な旅を行く自分であるのに、にぎやかに憂いもなく働いている『海人』の一人だと見られるのではない」という不満をうったえた(七二頁)と解する。集中の海人が「恋の苦しみ」と無縁な存在としてうたわれることも多いのは事実であるが、それは海人が中央官人と根本的に異質な「夷」の存在として捉えられることの一つの結果であって、詠歌主体による「恋情」がうたわれていない当該Ⅳ歌のような例にまでそのような表現性を認めることは難しいのではない。
- (48) 平舘氏注(23)前掲論文・五四頁
- (49) 注(13)拙稿・四九頁
- (50) 荒木良雄「稲日都麻・印南野考」(『国語・国文』二一四、一九三二年四月)
- (51) 井手氏注(37)前掲論文・六〇〜六一頁
- (52) 都倉義孝「人麿短歌の一発想——巻三253における隠妻伝説との関連——」(『国文学研究』三二、一九六五年一〇月)
- (53) 吉永登「柿本人麿の旅の歌八首について」(『万葉 通説を疑う』創元社、一九六九年。初出一九六七年二月) 一二六頁
- (54) 秦野武国「万葉二五三番歌をめぐっての推論」(『上代文学』二九、一九七一年一〇月) 五九頁
- (55) 神野志氏注(3)前掲論文・二七九頁
- (56) 中西氏注(16)前掲論文・一九三〜一九四頁
- (57) 木下正俊「斯くや嘆かむ」という語法」(『万葉集論考』臨川書店、二〇〇〇年。初出一九七八年九月) 三三〜四一頁
- (58) 鉄野昌弘「国見の望郷歌」試論」(『東京女子大学日本文学』八五、一九九六年三月) 一三頁
- (59) 和田明美「万葉集巻三一二二番歌をめぐって(一)——「あま」卑賤説への疑問——」(『愛知大学文学論叢』九六、一九九〇年一〇月) 二五頁
- (60) この八首で思慕される相手は共に「紀州の女として歌われている」(坂本信幸「人麻呂の紀伊の歌」『日本古代論集』笠間書院、一九八〇年、三二八頁)と解する説に従う。
- (61) 清水克彦「丹比笠麻呂の道行的望郷歌——赤人作歌との関係

を中心に――」(『万葉論集 第二』桜楓社、一九八〇年。初
出一九七八年六月) 八五～九二頁

(せきや ゆいち・北海道大学大学院博士後期課程)